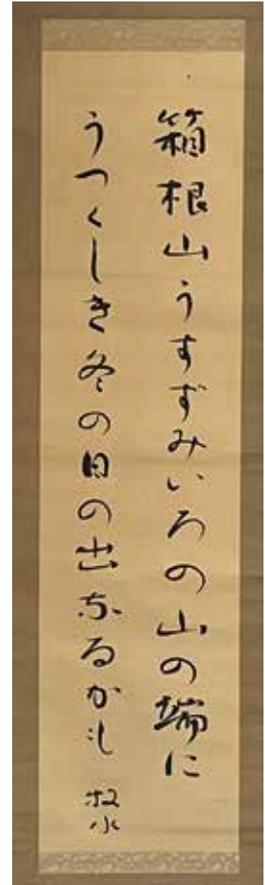


沼津市若山牧水記念館

第68号 令和4年3月1日 編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



箱根山うすずみいろの山の端に

うつくしき冬の日の出なるかも 牧水

歌集『黒松』に取められた「冬日月」と題する九首のうち
の第一首目である。箱根山は、沼津から東の方向にあり、
日の出前のあたりが未だ薄暗い中に、太陽が箱根山から
昇ってくる様子がよくあらわされている。

歌集『黒松』をみると、「冬日月」九首は、「その一」「そ
の二」「その三」と三首づつに分けられている。調べてみ
ると、『創作』大正十四年二月号に、牧水の短歌が六ペー
ジにわたって一〇六首掲載されている。この時の「創作社
便』には次のように書いてある。

本号では何と云つても小生の作が眼に立たうとおもふ。
これは十種類ばかりの新聞雑誌の新年号に発表したも
ので、十一月から十二月にかけ、同じく諸種新年号の
選歌に追はれながらの多忙の裡に作つたものです。何
日までといふ締切の日取までに一篇を作つて送り出し
ておいてはまた次ぎの日取の取りかかるという風な
惶しい中に、次ぎ次ぎと作つて行つたものである。そ
れらを一つに纏めて本誌に発表する時には多少の推

をも加へ、また松原の歌などをば全部
一つに纏めて取捨をも試みようと考え
てゐたのであつたが、右いふ編輯日取
の狂ひでそれも出来ず、全部それぞれ
の新聞雑誌に発表したままのものを
「その一」「その二」といふ風にして再
録したのです。とにかくあの忙しかつ
てゐます。

「冬日月」(その一)には、次の二首が続く。

朝づく日昇りさだまれば冬風ふゆかぜのほのかなる霽晴はるけれゆ
きにけり
真向ひゆひたときしたる冬空ふゆぞらの朝日の日ざしありが
たきかも

ところで、大正十三年末から十四年の牧水は、十三年九
月から始めた「揮毫頒布会」に忙殺されている。十三年
十一月に東京、十四年からは妻喜志子を伴つて、一月に大
阪・京都・神戸、二月に静岡・岡崎、四月に信州、六月に岐阜、
八月に千葉、九月に栃木、十月の終わりから十二月にかけ
て関西・九州と、各地に「揮毫頒布会」に出かけている。
その間を縫うように、十三年十二月には、八月に引つ越
した千本の借家から四五軒離れた借家へ転居した。十四年
二月に千本松原の一角に五百坪ほどの土地を購入し、延岡
中学校時代からの友人である建築設計士の村井武や西伊豆
土肥の大工の西川百乃助との打ち合わせをし、四月には地
鎮祭、八月には上棟式とつづき、十月五日に念願の「市道
の家」へ移っている。

酒の歌 牧水、勇、幸綱 谷岡 亜紀

私は大酒飲みが多いことで有名な土佐の高知で生まれ育った。幕末の土佐藩藩主・山内容堂は、自らを「鯨海酔侯」と称した。鯨の泳ぐ海の、大酒飲みの殿様。いつも二升入りの瓢箪で豪快に酒を呷っていたという。高知は酒の県民一人当たりの年間消費量も群を抜くとか。その高知市の真ん中、高知城のすぐ下に「ひろめ市場」という、地酒と地魚の屋台村のような場所がある。「ひろめ市場」は、昼間からいい感じに出来上がって酒臭い息を吐くおじさんたちで、いつもにぎわっている。男たちがそんなだから、高知の女は働き者で、気が強い。高知の酒は、よく言えば豪放磊落、天真爛漫。わるく言えば羽目を外し勝ち。高知市の繁華街を歩けば、「お客」(大皿の皿鉢料理を振るまう宴会)と称して盛大に盛り上がる光景が昼夜頻繁に見られる。いや、それは少し大げさか。

私の父方は昔、高知の造り酒屋だったそう。曾祖父は大の酒好きで、商売道具に手を出して日々酔っ払い、ついには仕込んだ新酒の樽をすべて腐らせてしまつて没落したとい

う。一九二九年、世界恐慌の年である。今も高知市内のメイン通りである「大橋通り」に、谷岡ビルという、往時のなごりの古いビルがある。かつて曾祖父が店を出していた場所、人手に渡つて名前だけが残っているのだという。先日死んだ父は、その前を通るたびにその話をしていた。酒は、エピソードに欠かない。

さて、近代短歌において大酒飲みの双璧と言えは若山牧水と吉井勇である。その牧水の酒と勇の酒を比べてみたい。

牧水は明治一八年生まれ。勇は翌明治一九年生まれ。ほぼ同年生まれと言つてよい。明治一八、一九、二〇年生まれには、他にも北原白秋、土岐善麿、石川啄木、柳原白蓮、九条武子、釈道空などのスターが並ぶ。まさに綺羅星の輝きである。

真打ち牧水の前に、まず吉井勇の酒の歌を見てみたい。

わが胸の鼓のひびきたうたらりたうたらり酔へば楽しき
『酒ほがひ』

酒びたり二十四時を酔狂に送らむとして
あやまちかな
『酒ほがひ』

紅燈の巷にゆきてかへらざる人をまことのわれと思ふや
『昨日まで』

気のふれし落語家ひとりありにけり命死ぬまで酒飲みにけり
『毒うつぎ』

夜半に起きてみづからの死を思ひつつ飲む酒なればいとど寒しも
『人間経』

私は去年、月刊誌「NHK短歌」の八、九、十月号に吉井勇の評伝を連載した。吉井勇は、一言でいうとものすごくドラマチックな人生を送った、人間的な魅力のある文学者で、ひとに好かれた。それも才能である。

一首目の「わが胸の鼓のひびきたうたらりたうたらり酔へば楽しき」。まず歌集名『酒ほがひ』の「ほがひ」とはことほぎ、祝である。歌集名を漢字で書けば「酒祝」「酒寿」。酒宴を催して祝い事をするのだが、祝祭としての酒、というニュアンスも込められているだろう。酒を褒める。酒を寿ぐ。そして飲酒自体が祝祭である。酒、飲酒はむしろ神聖なものであり、祝祭と結びついていた。たとえば神棚のお神酒や結婚式の三々九度、正月の御屠蘇。今も神事には酒を奉納する。この一首目の「たうたらりたうたらり



吉井勇（昭和10年）（吉井勇記念館提供）

「り」には、無邪気な、理屈のいらぬ酒の楽しみが集約されている。作品は、ほぼオノマトペだけでできている。オノマトペとは擬音語、擬態語の総称である。絵本や漫画、アニメに多用されるように、それは童心や遊び心の象徴である。まさに大の大人が、酔うほどに童心に帰る感覚であり、後で見る牧水の酒の歌にも通じる。酒を飲めば飲むほどに、胸の鼓が弾み始めて、それに合わせて踊り出す感覚である。この感じは私もよく分かる。いい酔い方である。ただ、どちらかと言うと勇の酒の歌には、二首目以下の、デカダンス、退廃、破滅への暗い志向がある。

酒びたり二十四時を酔狂に送らむとして
あやまちしかな
『酒ほがひ』

酒の上のあやまちを歌う。ちなみに「過ち」は「過ぎる」と同じ字である。過ちとは「過ぎる」ことなんだな。何が過ぎるか。悪ふざけが過ぎる。思いがりが過ぎる。平凡、中庸、頃合いで良しとせず、やり過ぎてしまうのである。人間の過ちがこのようなものだとすれば、それはある意味で文学と近い。文学には「とことん」「突き詰める」「最後まで行ってしまう」という要素が、ある意味で不可欠だからだ。「毒を食らわば皿まで」であり、限界まで。あるいはその向こう側まで、行ってしまう。行かざるを得ない。ブレーキが効かない。良識をはみ出してしまふ。「心の欲するままに振る舞えども、矩を踰えず」というのが、孔子が理想とした人間の完成形である。自分の望む通りに振る舞っても、常識・良識の範囲を超えることが無い。それに対してこの歌は、そうした平らかな人間性とは真逆の方向である。これを「無頼」といい、「デカダンス」という。「酔狂に送らむとして」一日二十四時間、酒を飲み続け、酔っぱらう。そうした生き方を自ら望んでいる。そして「あやまちしかな」。まあそうなるわな、ということであろう。でも、繰り返すが「あやまち」には甘い文学的誘惑がある。ポードレールもランボオも、若きフィッツジェラルドもヘミン

グウェイもヘンリー・ミラーも、中原中也も太宰治も永井荷風も金子光晴も、みんなその誘惑に逆らわなかった。逆らえなかったのではなく、自ら「矩」を越えた。良識の向こうに文学があり、人間の神髄がある、と考えたのだった。若き吉井勇は、まさに新進の「耽美派歌人」「無頼派歌人」、そして劇作家として人気を集め、短歌を越えた流行作家になった。

紅燈の巷にゆきてかへらざる人をまことのわれと思ふや
『昨日まで』

酒浸りで過ちを繰り返し、酔狂で済まなくなり、紅燈の巷のあやしい歓楽街で酒色におぼれる。「まことのわれと思ふや」は、苦しい開き直りである。アルコール依存症の酒飲みの多くは、かならず「今のタガが外れた自分は仮の姿であり、本当の自分は違う」と言い訳しつつ、深みにはまってゆく。

氣のふれし落語家ひとりありにけり命死ぬまで酒飲みにけり
『毒うつぎ』

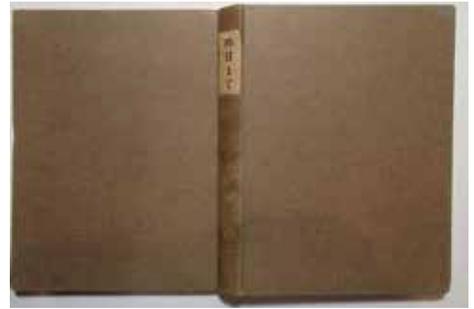
吉井勇は、劇作家として役者、落語家、花柳界と付き合いが広かった。なにせ若い時から「紅燈の巷」に入りびたり、家に帰らない生活をしていた。そうした席で多くの酒の友人を作った。この歌も、知り合いの落語家を



『酒ほがび』（吉井勇記念館提供）

題材にしていると考えられるが、この「気がふれてついに死ぬまで酒を飲み続けた噺家」は、もはや他人事ではない。明日の自分の姿であり自画像である。

こうしたデカダン、破滅衝動には、吉井家という没落した伯爵家の出であること（滅びの意識）と、柳原白蓮の姪で絶世の美女といわれた妻との破局がある。ちなみに「心の花」の歌人、柳原白蓮と九条武子は「大正三美人」に数えられた（あと一人は新橋の芸妓）。華族や芸妓はある意味で今の芸能人の感覚である。ゴシップが記事になり、ブロマイドが売られた。吉井勇の最初の妻は、その白蓮の姪である。没落した伯爵家どうしの婚姻は最初から



『昨日まで』（吉井勇記念館提供）

うまくゆかず、勇は同居数日で家を出て、旅を住処とする。そしてついに自殺を考えるようになる。そこには明らかにアルコール鬱があった。

夜半に起きてみづからの死を思ひつつ飲む酒なればいとど寒しも
『人間経』

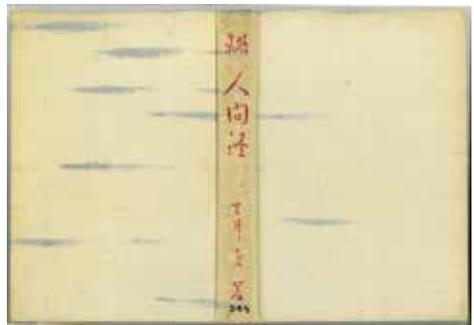
依存症の人が酒が切れると、極端な落ち込みが起る。離脱症状（禁断症状）のひとつと言われている。私も二日酔いの朝はつらい。ちなみに「ひどいどしやぶり」という私の最新歌集のタイトルは、そのような感覚とそう遠くないかも知れない。吉井勇は、同時期に次のような歌も残している。



『毒うつぎ』（吉井勇記念館提供）

吾子を思へば縊れかねつと云ふ歌のありしを思ふとある夕に
『人間経』

この「吾子」は、吉井勇の一人息子・吉井滋氏。のちに「後樂園スタヂアム」の支配人となり、プロ野球のいわゆる「天覧試合」（昭和天皇のプロ野球観戦）の実現に尽力した。長嶋茂雄のあの劇的なサヨナラホームランの陰には、吉井勇家の力があつた。そうした吉井家と吉井勇にまつわるドラマは、挙げればきりがなが今は先を急ぐ。
勇は神奈川の田園地帯に隠棲し、そして離婚。さらに土佐の山の中の庵に籠り住む。その地「猪野々」には現在、吉井勇記念館が建



『人間経』（吉井勇記念館提供）



『海の声』



若山牧水 (大正12年)

つ。吉井勇は土佐の山中の素朴な隠遁生活いんとんによって、魂のリハビリをし、そして再婚する。素朴な土佐の高知の風土と酒と、そして再婚した妻の愛が、吉井勇を暗い沼から救ったのである。そして新しい妻と京都に戻り、祇園の名士として円満な晩年を過ごした。高知に今もある高知酒造が出している土佐の銘酒「瀧嵐たきあらし」は、吉井勇の命名である。



『独り歌へる』

牧水の酒の歌は、無邪気で明るい。邪気がない。計らいや小理屈がない。「酒には何故がないのがよい」とは、私の師佐佐木幸綱の言葉である。何故飲むかとか、そんな小理屈

次にいよいよ若山牧水の酒の歌を見たい。
ちんちろり男ばかりの酒の夜をあれちん
ちろり鳴きいづるかな 『海の声』
はた、神遠鳴りひゞき雨降らぬ赤きゆふ
べをひとり酒煮る 『独り歌へる』
かんがへて飲みはじめたる一台の二合の
酒の夏のゆふぐれ 『死か芸術か』
鉄瓶てつびんのふちに枕しねむたげに徳利とくりかたむ
くいざわれも寝む 『山桜の歌』
足音を忍ばせて行けば台所にわが酒の壺ひん
は立ちて待ちをる 『黒松』

は一切関係なく、飲みたいから飲む。そこに酒があるから飲む。こうなると仙人の境地である。酒に理屈はいらない。そこが酒の良さだ。牧水の酒がまさにそうだった。

ちんちろり男ばかりの酒の夜をあれちん
ちろり鳴きいづるかな 『海の声』

第一歌集『海の声』より。同歌集には明治三九年前半から四一年までの作品を収める。牧水二十代前半である。掲出歌は長い旅の途中の酒宴を歌う。牧水は講演や歌会に呼ばれて頻繁に各地を巡った。与謝野晶子、吉井勇、牧水、みなそのような人生を送った。この「ちんちろり」の歌は紀州・和歌山滞在中の、宴会の席の歌。虫の音が聞こえるから、秋の酒である。熱燗が美味い季節だ。それにしても無邪気な酒の歌である。牧水の性格は基本的に大らかで、人に好かれる。その大らかさがまことによく出ている。

はた、神遠鳴りひゞき雨降らぬ赤きゆふ
べをひとり酒煮る 『独り歌へる』

第二歌集『独り歌へる』。同歌集には明治四一年、四二年の歌を収録。二十代半ばの歌である。そのわりに大人っぽく格調がある。明治の人間は二十歳過ぎれば堂々とした大人



『山桜の歌』



『死か芸術か』

であった。「はたた神」は雷。遠雷が鳴り響いている。雨がすぐにも来そうなのに、まだ降っていない。そうした微妙な時間の感覚を読みたい。そして空がやけに赤い。夕暮れのひとときである。作品は予感に溢れた時間の手触りを捉える。そうした予感の中で、自分はいつものように酒を温めている。一人だけの酒宴の前の、ちよつと華やぐ時間である。「ひとり」「独り」は牧水の最大のキーワードで

ある。この歌集のタイトルも『独り歌へる』であった。

かんがへて飲みはじめたる一台の二合の酒の夏のゆふぐれ
『死か芸術か』

「かんがへて」とある。思索的な一人の酒である。人と飲むと話をする。声が大きくなる。一人で飲む時は自分に向き合うしかない。内省的、思索的になる。牧水のキーワード「独り」がここにもある。まさに一人に向き合う酒である。そして酔うほどに世界は曖昧になり、最後は自分と、酒を充たす徳利だけが残る。豊饒な孤独と言うべきか。

鉄瓶のふちに枕しねむたげに徳利かたむくいざわれも寝む
『山桜の歌』

そしてさらに飲み進むと、ますますすべてはおぼろになり、やがて「自分」も「独り」も消失する。自意識が消えた時、空の徳利を発見する。熱燗徳利が、お湯を張った鉄瓶の縁に傾いて眠っている。いやあ、酔った。満足し堪能した。楽しかった。自分も寝よう。いい酒である。こんな酒を飲みたいものだ。

足音を忍ばせて行けば台所にわが酒の壘は立ちて待ちをる
『黒松』



『黒松』

晩年（といっても四三歳で亡くなったが）の歌。酒を医師に止められて盗み酒をする場面である。酒壘がちゃんといつものように待っていてくれる。文句なく待っている。酒は、医者のように理屈は言わない。説教しない。特に「わが酒の壘」がいい。同志なのである。一心同体である。死が近いのに茶目っ気一杯である。最後まで、死ぬまで、少なくとも歌の上では牧水の酒は無邪気で明るい。だがある種のアルコール依存症であったことは想像できる。酒量は毎日、朝二合、昼二

合、晩六合の一升。しかも旅先や来客がある
とその倍以上飲んだという。これが毎日だと
必ず肉体的に依存症になるはずである。来客
があると酒が途絶えないので、さすがに体を
心配して沼津に引っ越したのだった。【ジュ
ニア・ノンフイクション】若山牧水ものがた
り「桶木しげお著」にそのあたり詳しい。同
書の執筆には「沼津市若山牧水記念館」（館
長・榎本篁子氏）や「若山牧水記念文学館」（館
長・伊藤一彦氏）の協力をえたと巻末にある。

しかし牧水は、酒乱でなく、アルコール鬱
にならず、人に絡まず、鬱屈せず、あくまで
明るい酒だったようだ。こういうのは珍しい。
ふつうは依存が進むと、脳内のセロトニンが
疎外されて、鬱になり、破滅衝動が起こる。
身体的にも、いろいろな辛い症状が出る。牧
水はよほど酒と相性が良かった。普通は物理
的に一定量を越えると必ず内臓と精神が荒廃
し、崩れてゆく。科学的、医学的にはかなら
ずそうなるはずである。しかし牧水はそうは
ならない。学生時代に酔っぱらって電車（路
面電車か）を止めたという話が『若山牧水も
のがたり』に出て来る。今ならアウトである。
しかし当時はバンカラな武勇伝で済んだ。や
はり明るい。中原中也や山頭火のような、絡

み酒、酒乱ではない。

牧水の酒で思いつくのは佐佐木幸綱である。
やはりかなりの酒量を飲み続けても、酒乱に
ならない。牧水と幸綱は酒に愛された、たぐ
いまれな人である。ただ、私の住む神奈川県
の、有名なアルコール依存症治療の拠点病院
「久里浜病院」のかつての院長で作家のなだ・
いなだ氏は「若いころからの依存症の人は平
均すると45歳で亡くなる」と、確かどこかで
発言していた。依存症の平均寿命四五歳。そ
して牧水は四三歳で没した。

牧水の酒に関して、「伊藤一彦が聞く牧水
賞歌人の世界」から印象深い話を紹介したい。
亡くなった小高賢さんへのインタビュウでの
やり取りである。

小高 牧水の奥深い悲しみ。それをわれわ
れはうまくつかめていないような気が
する。有名な（窪田）空穂に「あ
なたは何で酒を飲むのですか」と訊
かれると、「もう朝、たまらないの
ですよ。飲まなきゃいられない。本
当は、酒は好きじゃない」と答える。
伊藤 娘（牧水の長女、みさきさん）もそ
れを書いている。父親の酒は、「や
っぱりほかの人ならやり過ぎること

ができることをやり過ぎせないから、
父は飲んでるんです」と。

牧水の酒は、「ひとり」「孤独」を見据える
酒だった。繰り返すが「ひとり」は牧水の歌
の最大のキーワードだと言える。その酒は、
人間の根源的な孤独を直視する酒だった。そ
こに、牧水の酒の歌の深さと普遍性がある。

最後に、現代短歌における酒の第一人者、
佐佐木幸綱の歌を見たい。

したたかに地酒に酔って八月の旅に笑え
り 海荒るるらし 『群 黎』
さらば象さらば抹香鯨たち酔いて歌えど
日は高きかも 『直立せよ一行の詩』
あずさゆみ春の笑いを笑いつつひたすら
酔わん杯上ぐるなり 同
月下独酌一杯一杯復一杯はるけき李白相
期さんかな 同
徳利の向こうは夜霧、大いなる闇よしと
して秋の酒酌む 『火を運ぶ』
したたかに地酒に酔って八月の旅に笑え
り 海荒るるらし 『群 黎』

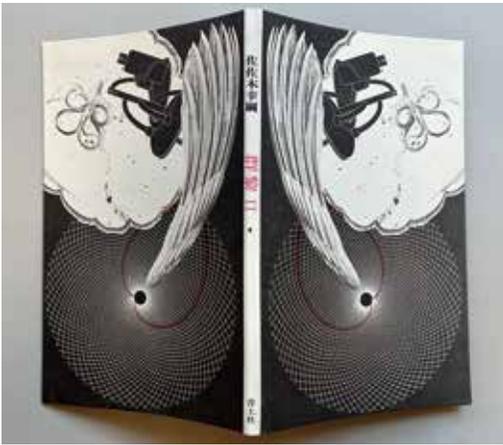
『群黎』は三一歳の第一歌集。従って二十
代の酒だろう。二十代で「したたかに地酒に



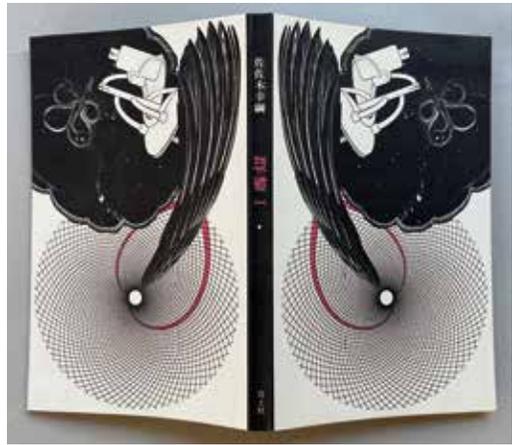
佐佐木幸綱

さらば象さらば抹香鯨たち酔いて歌えど
日は高きかも 『直立せよ一行の詩』

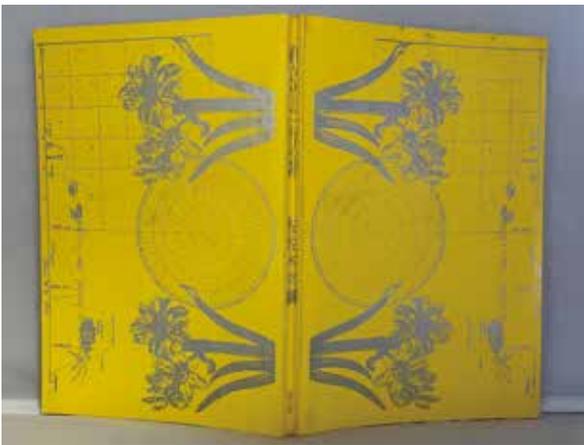
酔って」とはさすが酒好きだと納得する。作品は夏の旅における旅先の酒の歌。解放感がよく出ている。土地土地の料理と地酒は、旅の最大の楽しみだと言える。それにしても「酔って笑えり」。どこまでも明るい酒であり、理屈なしの酒である。小賢しい理屈は抜きに、酔って楽しくなって大笑いする。肯定的な酔いっぷりが気持ちいい。「酒にはなぜがないのがよい」という幸綱の言葉を借りれば、まさに何故のない酒である。なーんにも考えず、ただ酔いに身を任せる。酔って大笑いする。すると海もそれに答えて豪快にぎぶーんと大波をたてる。いいなあ。



『群黎 II』

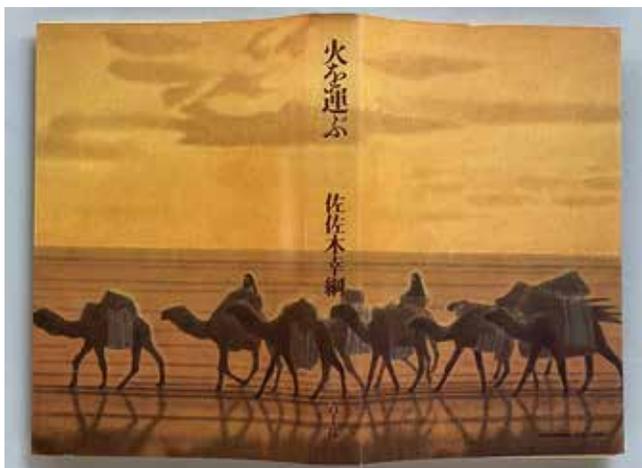


『群黎 I』



『直立せよ一行の詩』

第二歌集の歌。やはり、酔ってご機嫌になつて、笑つて、そして歌う。あくまで解放的な酒で、大らかで解放的で素朴である。肯定的である。「自己否定の文学」「苦悩の文学」というのが、かつて文学の一つの形としてあった。そうした苦悩と否定の文学に対して「もつと大らかに肯定的に歌う」という方向を打ち出したのが佐佐木幸綱だった。
ゾウは地上動物で最も大きい。クジラは水棲動物で最も大きい。そうした存在自体が際立つものへの愛着と敬意を読みたい。そこに



『火を運ぶ』

はやはり、小賢しい理屈はない。ただばかり存在そのものとして、ゾウもクジラもそこにある。それはやはりすごいことである。つまりこの歌は、尊敬し敬愛するそうした存在に挨拶する感覚である。君たちは君たちでしっかり生き延びよ。自分は自分の場所ですとん、こころゆくまで酔っ払う…。酔うことが「生」を確かめることとしてある。それは酒のひとつの境地である。

あずさゆみ春の笑いを笑いつつひたすら酔わん杯上ぐるなり 『直立せよ一行の詩』

「あずさゆみ春」。枕詞による、大らかな万葉調が楽しい。ここでも作者はやはり酔って笑う。理屈なく酔い、そしてその酔いをどこまでも楽しむ。「ひたすら酔う」。酔うことにまつぐで、ひねっていない。こざかしくない。それが作者の酒であり、酒の哲学である。

月下独酌一杯一杯復一杯はるけき李白相期さんかな 『直立せよ一行の詩』

詩の仙人「詩仙」にして、酒の仙人「酒仙」である李白に遥かに呼びかける歌。李白は「二日すべからく三百杯飲み干すべし」と豪語した。「一杯一杯また一杯」は李白の漢詩からの引用で、全体に漢詩調を取り入れる。「月下独酌」とはひとりの酒だが、しかしこの独酌は、李白と二人で飲み交わす対酌である。月光に祝福された限りなく贅沢な酒の歌である。どうせ酔っぱらうなら、これくらい大きな夢に遊びたいものだ。

徳利の向こうは夜霧、大いなる闇よしと
して秋の酒酌む 『火を運ぶ』

大人の酒である。牧水の「白玉の歯にしみと

ほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけれ」の向こうを張る、たつぷりとした秋の気配がある。たつぷりとした夜霧。たつぷりとした闇の分厚さ。そしてたつぷりと豊かな酔い心地。徳利と作者がさして向かい合う感覚である。私もそろそろこういう酒を飲みたいけれど、まだまだである。還暦を過ぎていまだにたつぷりとした大人になり切れないのがかなしい。しかし、心ゆくまで酒を飲めない感染症の今のご時世に、せめて極上の酒の歌で酔いたいものだ。そこにもまた、大いなる酒の楽しみがある。

「筆者プロフィール」たにおか あき



昭和三十四年
高知県生まれ。
早稲田大学第一
文学部西洋
哲学科中退。
昭和五十五年
に「心の花」
入会、佐佐木

幸綱に師事。現在「心の花」選者。神奈川新聞「神奈川歌壇」選者。歌集に『臨界』『アジアパザール』『闇市』『風のファド』ほか。評論集『(劇)的短歌論』『言葉の位相』ほか。エッセイ集『歌の旅』詩集『鳥人の朝』がある。令和二年、第五歌集『ひどいどしゃぶりで第二十五回若山牧水賞を受賞。令和三年十月三日に開催した第六十八回「沼津牧水祭・短歌大会」の講師。

第三十二回

中学生短歌コンクール

第三十二回となる中学生短歌コンクールは、例年どおり市内中学校の参加により、千七百五十八首の作品が集まった。本年度も昨年度に引きつづき、新型コロナウイルス感染症の流行により、中学生の生活にも新しい様式が定着したことを感じさせる作品が見受けられた一方、「今を生きる」不変の中学生の姿を生きて詠った作品も多くあった。総評については後述する。

今回も新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、沼津牧水祭・碑前祭の開催を中止することとなり、表彰式は行われなかったが、入選五十四首が選ばれ、うち十首が特選作品に選ばれた。以下、特選作品を紹介する。

まわりとはまるで違った味がある兄のお
下がり通学バッグ 諏訪華苗（第一中）

妹や弟は、兄や姉には分からない「お下がり」という経験と共に成長していく。大人にとっては合理的な制度だが、こどもはそれに對して不満を持つこともあるだろう。ところが作者は、それを実にプラス思考で捉えてい

るのだ。ポジティブで清々しい一首である。

こがねいろでできたコロツケさくさくだ
世界一の母ちゃんコロツケ

原賀奏多（第四中）

日本の豊かな食生活の中でも、家庭の味として圧倒的な人気を誇る料理のひとつがコロツケだろう。母親が揚げてくれるコロツケの熱さ、その好物に對する作者の熱量、そしてその家庭の温かさが伝わってくる一首である。

入学式一人で帰りくつづれが友と帰る日
かさぶたになる 原田大雅（第五中）

新生活に合わせて用意したであろう靴を履いて、入学式の日、作者は「一人」で帰った。しかし、友達ができて一緒に帰った日には、くつづれがかさぶたになっていた。その時間の経過が丁寧な表現され、作者が新しい環境で頑張っていた過程も見えてくる一首である。

亡くなった猫を埋葬した場所に彼岸花咲
く「また会いましょう」

大坪くらら（大平中）

向き合い方によって、動物と人間の心は十分に通い合う。大切に過ごした猫との優しい時間はかけがえのないものだろう。作者は喪

失の大きな悲しみの中でも愛猫からのメッセージを受け取るうとし、前を向こうとしている。心の美しさを感じさせる一首である。

校庭の水溜まりの中青空と梅雨明けの虹
みんなとのぞく 長岡依葉（暁秀中）

長い梅雨の期間は、気分も重くなりがちであるが、いよいよその梅雨が明けた。校庭の水溜まりに映っている青空と虹への感動だけでなく、仲間と共有している夏本番への高揚感まで伝わってくる一首である。

休み明け制服起こし教科書と挨拶交わし
朝露の道 松本萌香（愛鷹中）

コロナ禍において、中学生も今までにない休校やオンライン授業を体験しただろう。「休み明け」は、通常の「（長期）休み明け」という意味を越えているのかもしれない。お馴染みの学校素材を擬人化することによって、通学という日常の喜びが伝わってくる一首であり、結句の「朝露の道」も詩を効かせている。

夕焼けに混ざる紫輝いてカメラ向けても
映らぬ景色 和泉花果（第四中）

携帯電話の普及により、現代では撮影が日常生活の一部に組み込まれている。スマホか

デジカメかは分からないが、作者が向けたレンズの中には微妙な光のニュアンスが捉えられていなかった。作者の感性の細やかさが表現されていると共に、便利なカメラに残らない対象があることも感じさせる一首である。

三年生涙あふれる試合後の写真に映るつ
くった笑顔 袴田瑠波 (第三中)

部活動の先輩たちにとって、最後の試合だったのだろう。悔しい結果で終わったのだが、記念写真では精一杯の笑顔をつくっている。それは、三年間の部活動の締め括りがその日の結果だけを示しているわけなのではない、という三年生の強い思いであり、次の代を担う作者が確かにその思いを感じ取っているのである。

朝の五時母の指令で探すのはかばんに眠
る集金袋 伊藤羽琉 (金岡中)

現代の社会では、中学生も忙しい。集金袋を出して頼んで持っていく、という一連の行動についても、すっかり忘れてしまう時があるかもしれない。しかし、母親は一枚上手で早朝でも容赦ないのだ。具体的な時間設定や「母の指令」「かばんに眠る集金袋」といった言葉の選択により、リアリティとユーモアを

併せ持つ一首に仕上がった。

雨雲が絵の具をたらしぬり直す昨日の紫
陽花今日は何色 植松咲名 (浮島中)

紫陽花が美しい季節を詠んだ歌は多い。しかし、作者の視点では、雨は絵の具であり、それによって日々、紫陽花の色が変わるのだ。人生に同じ一日がないのと同様、昨日とは違う今日が始まるという期待感。梅雨の時季でも作者の明るい心持が伝わる一首である。

以上の特選作品は、どの作品も今を生きる中学生の生活から生み出される率直で素朴な思いが短歌に表現されており、時代や世代を超えて読者が共感できる秀歌だと思われる。

一方で、総評として「あと一步」の作品の^{存在}しさにについて述べたい。

筆者は今回、初めて選者を務め、全ての投稿作品を拝読したが、「あと一步」の作品の余りの多さに驚きを隠せなかった。あと少しのアレンジによって、ぐっと作品の完成度が上がるといふレベルが多すぎる印象なのである。ぜひ、先生方から、特に「具体的な体験の設定」と「作者の思いの言語化」について、もう一言のアドバイスを加えていただきたい。それは、沼津の中学生の短歌創作における全

体のレベルアップに繋がると考える。

ただ、筆者自身も学校現場に身を置く人間のため、教師業の多忙も痛感している。そこで、文芸創作指導の専門として、「短歌教室」の特別授業を紹介させていただく。筆者は、沼津市教育委員会の「チーム学校」実現事業の一環として、第二小、千本小、香貫小など、市内の希望する小学校で「短歌教室」の特別授業を実施している。今年度で三年目となったが、創作経験のない中学年の大半の児童たちが、単発の授業で次々と良い視点の短歌を創作し、発表し合う様子を目にしてきた。

本コンクールは、若山牧水の名を冠した会の主催である。沼津は牧水に選ばれたまちであり、風光明媚で詩の素材に溢れている環境は、中学生の感性と言語センスが磨かれる全国でも類まれな風土だろう。中学校でも本事業を活用していただき、微力ながら沼津の中学生の短歌創作に協力させていただければと思う。そして、沼津の新しい文化価値として、「中学生の誰もが歌人になれるまち・沼津」を共に目指していただくことを願っている。

選歌は、沼津牧水会理事の永久保英敏と河本尚子、及び、沼津牧水会会員で静岡県短歌協会委員の勝俣文子が行った。(勝俣文子)

第二十六回若山牧水賞に 黒瀬珂瀾氏の歌集『ひかりの針がうたふ』



(宮崎日日新聞社 提供)

第二十六回若山牧水賞は、黒瀬珂瀾氏の第四歌集『ひかりの針がうたふ』に決まった。選考委員は、佐佐木幸綱、高野公彦、栗木京子、伊藤一彦の四氏である。

黒瀬氏は昭和五十二年大阪府生れ。大阪大大学院文学研究科修士課程修了。広告制作業などを経て現在は富山市の願念寺住職。受賞作品は福岡で過ごした時期に環境管理の仕事から見えた自然の姿や東日本大震災の実像、娘の育児で感じた「命」への驚きなどを詠っている。平成十五年に第一歌集『黒耀宮』で第十一回ながらみ書房出版賞、平成二十八年に第三歌集『連喰ひ人の日記』で第十四回前川佐美雄賞を受賞。未来短歌会、読売歌壇選者。小学校二年の授業で俳句を学び、中学入学前後に俳句より文字数の多い短歌について興味を持った。さらにゲームの本に短歌が載っ

ていて塚本邦雄や現代短歌の存在を知った。そして高校時代に出会ったのが後に師匠となった春日井建先生の歌だった。「先生には自分の言葉に美意識を持つことを体現して教えてもらいました。今でも憧れの存在です」と語った。

選考委員の各氏は以下のように評している。佐佐木幸綱氏は、「環境問題を扱う会社に従事したときの歌が、この歌集の大事な部分になっている。割と新しい歌が多い一方、古典和歌の中で使われている古い言葉をうまく使った歌集になっている。子どもの歌と環境問題に関わる仕事を、新しい表現と『あれれ』に代表されるような伝統的な言葉で表現した歌集だ」。

高野公彦氏は「水質調査をする人が短歌を詠むというのは珍しく、歌集の中にこうした『仕事の歌』が出てくるのが面白い」。

栗木京子氏は「男女で身体的、精神的な違いがあることを面白がっている。生々しくなりそうなテーマをユーモアにくるんで本質に迫っており、今後も期待できる歌人だ」。

伊藤一彦氏は三十代、四十代には生活の輪郭が見えにくい歌集が多いが、黒瀬さんの歌

集は仕事、生活、家庭の輪郭がはっきり見える。歌い方もしつかりしており説得力がある」。

なお、授賞式は、令和四年二月十四日(月)に宮崎市の宮崎観光ホテルで行われる予定だったが、新型コロナウイルス感染症の拡大に鑑みて延期された。

歌集『ひかりの針がうたふ』からの自選十首を紹介する。

光漏る方へ這ひゆくひとつぶの命を見つむ闇の端より

余したる離乳食わが白米にかけて済ませる朝餉のあはれ

父われの胸乳をひたに捻りゐる娘よ黄砂ふる夜が来る

言葉を五つ児が覚えたるさみしさを沖の真闇へと流して帰る

線量を見むと瓦礫を崩すとき泥に染まりしキティ落ち来ぬ

熱の児が眠りゆきつつしがみつくわれはいかなる渡海の筏

冬田を削る男らの影とほく見てわが被曝けふ10μSv

けふひとひまた死なしめず寝かしつけ成人までは六千五百夜

妻と児を待つ交差点 孕みえぬ男たること申し訊なし

児は遠き弥生の野火を見つめをり外輪山を背にして抱けば